

樽前山の火山活動解説資料（令和5年6月）

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められません。
なお、山頂溶岩ドーム周辺では高温の状態が続いていますので、突発的な火山ガス等の噴出に注意してください。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴気など表面現象の状況（図1、図2-①～⑥、図3～4）

5～7日に実施した現地調査では、A火口及びH亀裂で高温状態が継続していました。2020年6月の観測以降、噴気温度の低下傾向が認められています。

監視カメラによる観測では、各火口や噴気孔群の噴気の高さは火口縁上概ね100m以下で経過しました。噴気の高さは2021年秋頃にやや増大し、現在もその状態が継続しています。

・地震及び微動の発生状況（図2-⑦～⑨、図5）

火山性地震の回数は少なく経過し、主に山頂溶岩ドーム直下の深さ0km以浅で発生しました。火山性微動は観測されていません。

・地殻変動の状況（図6）

GNSS連続観測では、火山活動の高まりを示すような変化は認められません。



図1 樽前山 南側から見た山頂部の状況（別々川監視カメラによる）

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』、『数値地図 25000（行政界・海岸線）』、『基盤地図情報』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和5年7月分）は令和5年8月8日に発表する予定です。

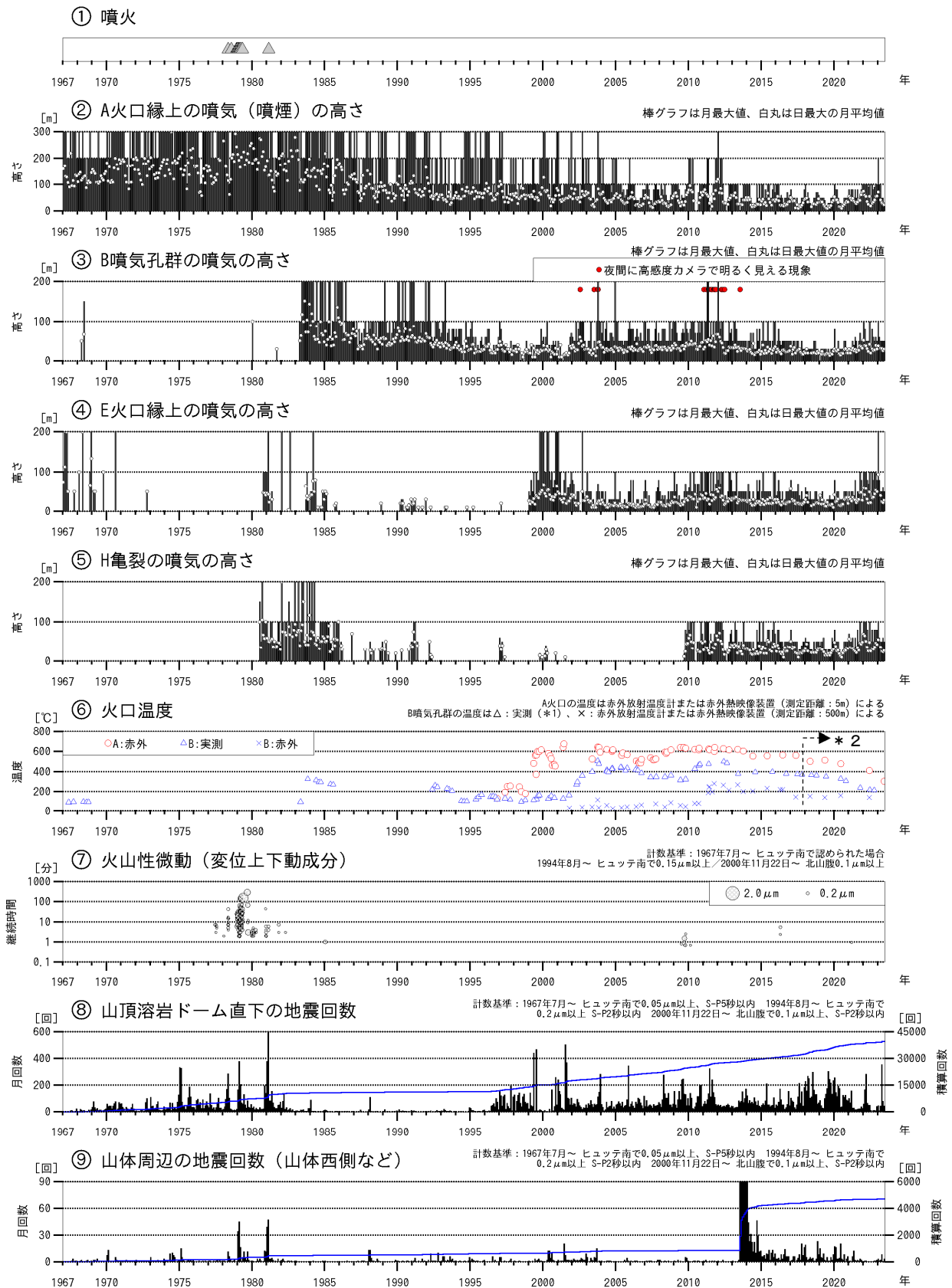


図2 樽前山 火山活動経過図 (1967年1月～2023年6月)

- * 1 : 産業技術総合研究所及び北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータを含みます。
- * 2 : 2018年機器(赤外熱映像装置)更新以降では、以前と比較して温度が低く観測される場合があります。



図3 樽前山 山頂溶岩ドーム周辺図と赤外熱映像及び写真の撮影方向（矢印）

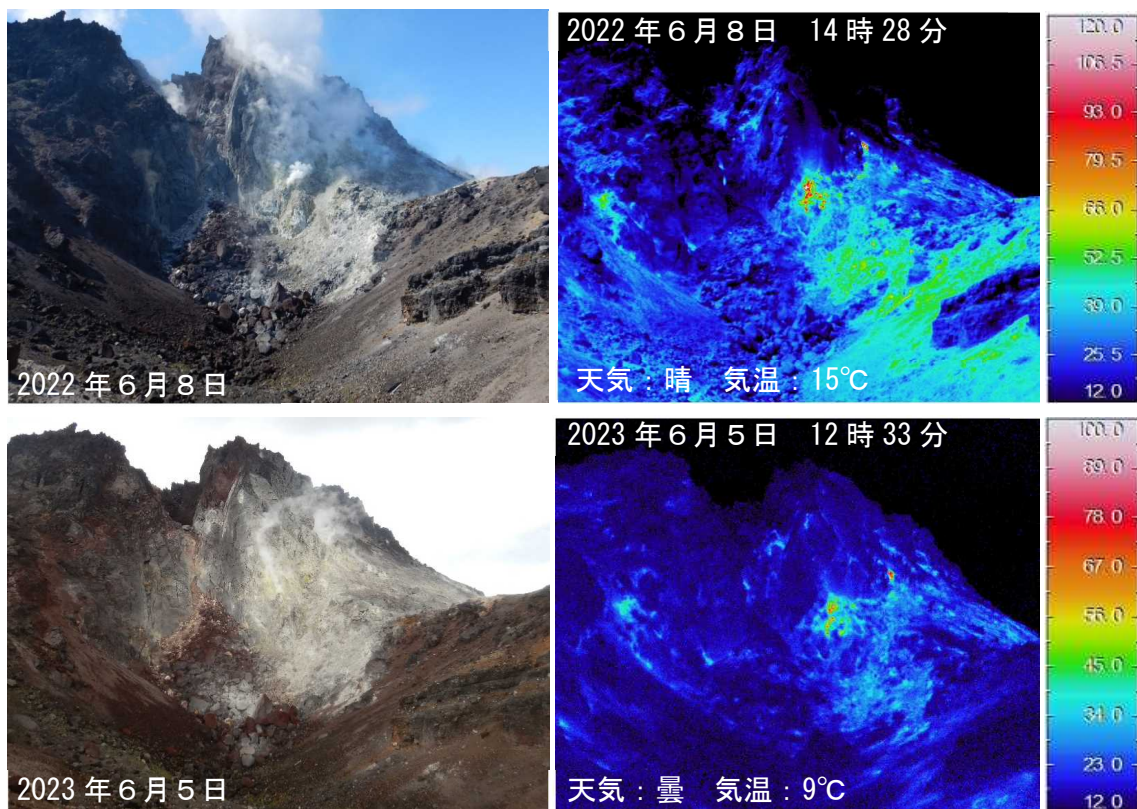


図4 樽前山 赤外熱映像装置によるH亀裂の地表面温度分布の比較

南側（図3の①）から撮影

- ・ H亀裂では、2020年6月の観測以降、引き続き噴気温度の低下が認められました。

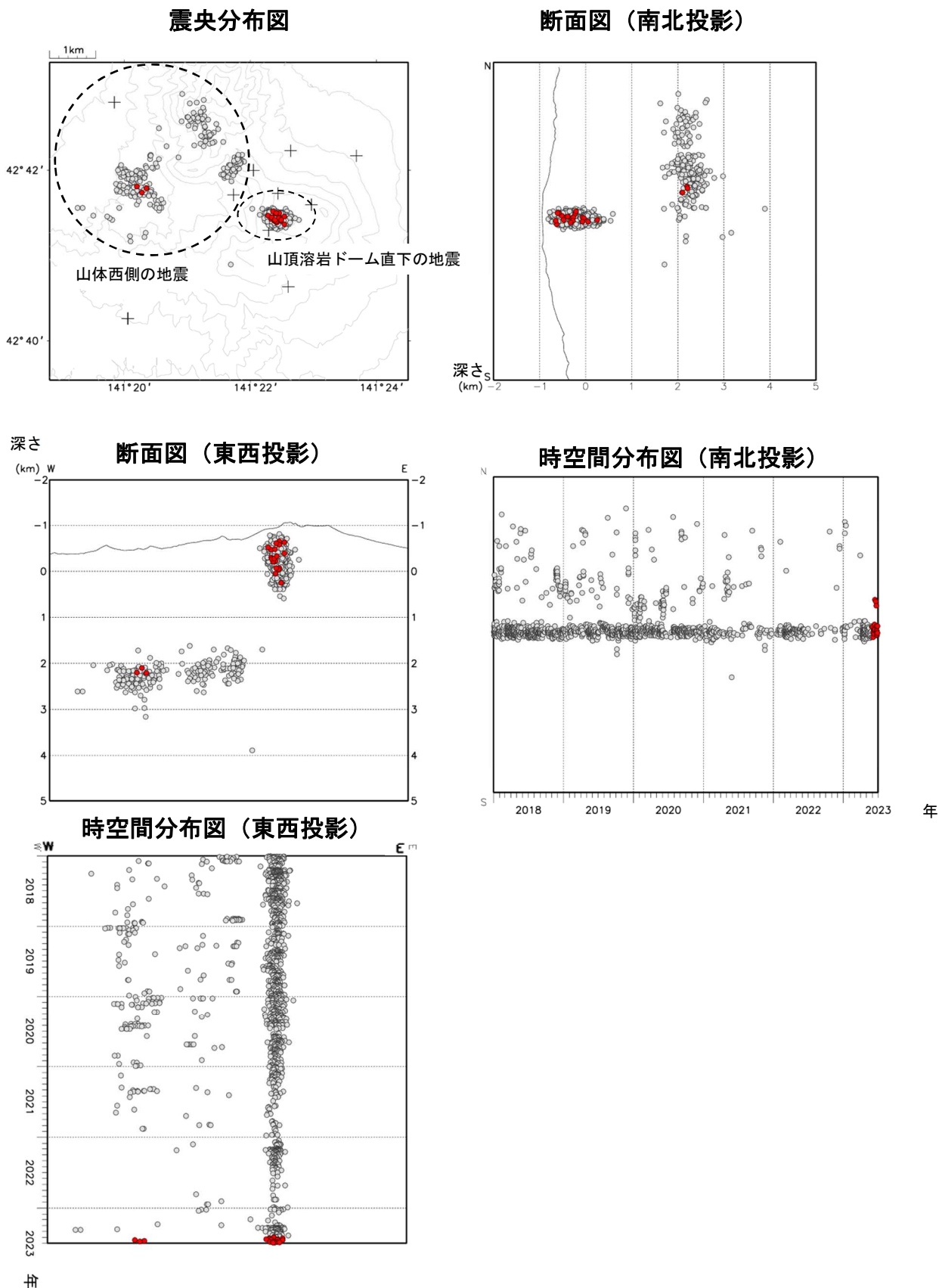


図5 樽前山 火山性地震の震源分布（2018年1月～2023年6月）
 ○：2018年1月～2023年5月の震源 ●：2023年6月の震源 +：地震観測点

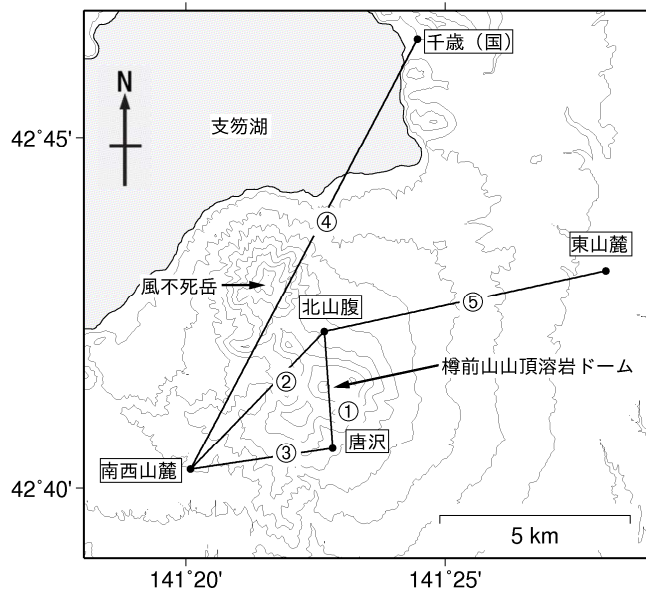
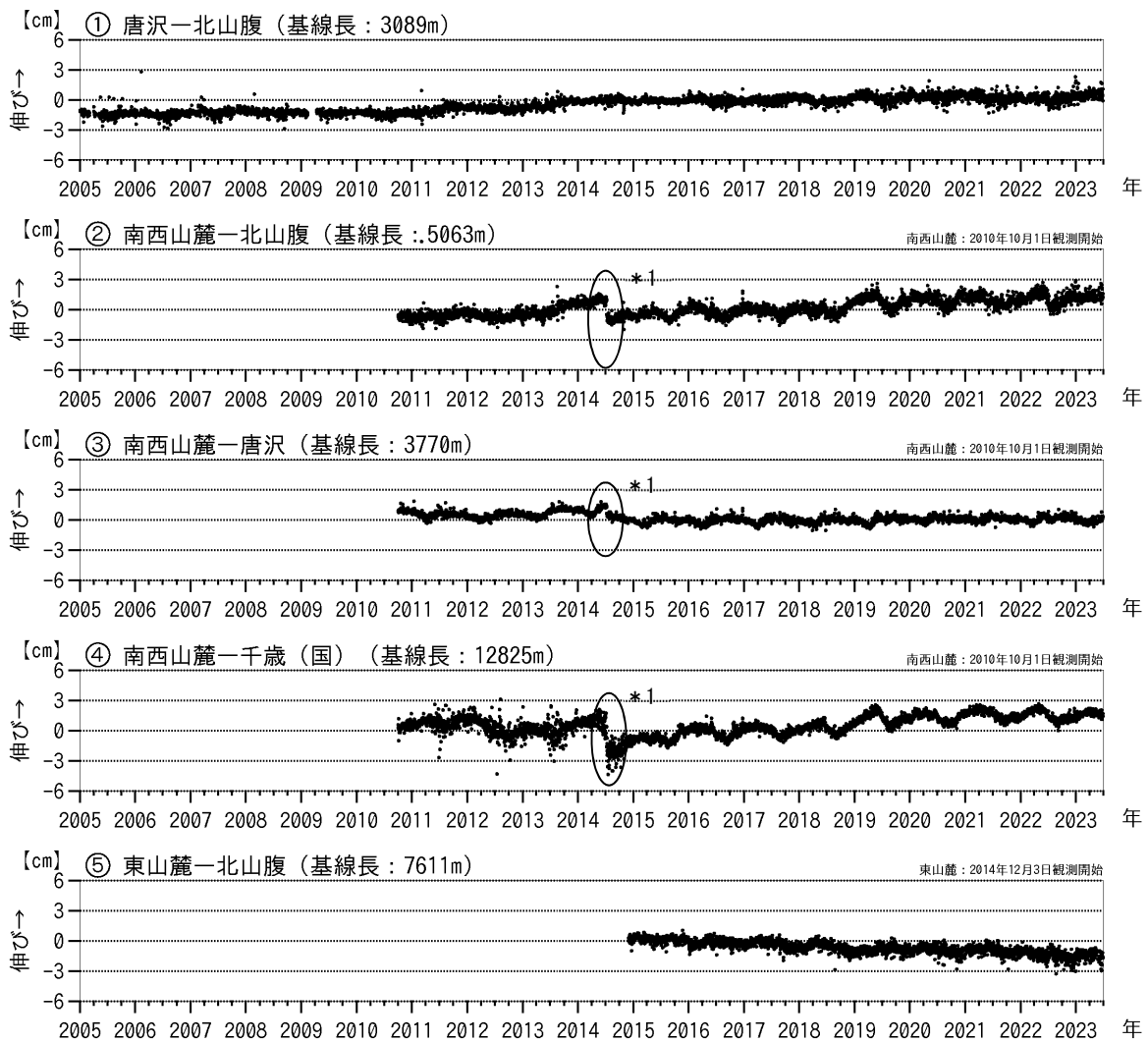


図6 樽前山 GNSS連続観測による基線長変化（2005年1月～2023年6月）及び観測点配置図
 グラフ①～⑤は観測点配置図の基線①～⑤に対応しています。
 グラフ中の空白部分は欠測を示しています。
 ②～④の楕円内の変動（*1）は2014年7月8日に発生した胆振地方中東部の地震によるものです。

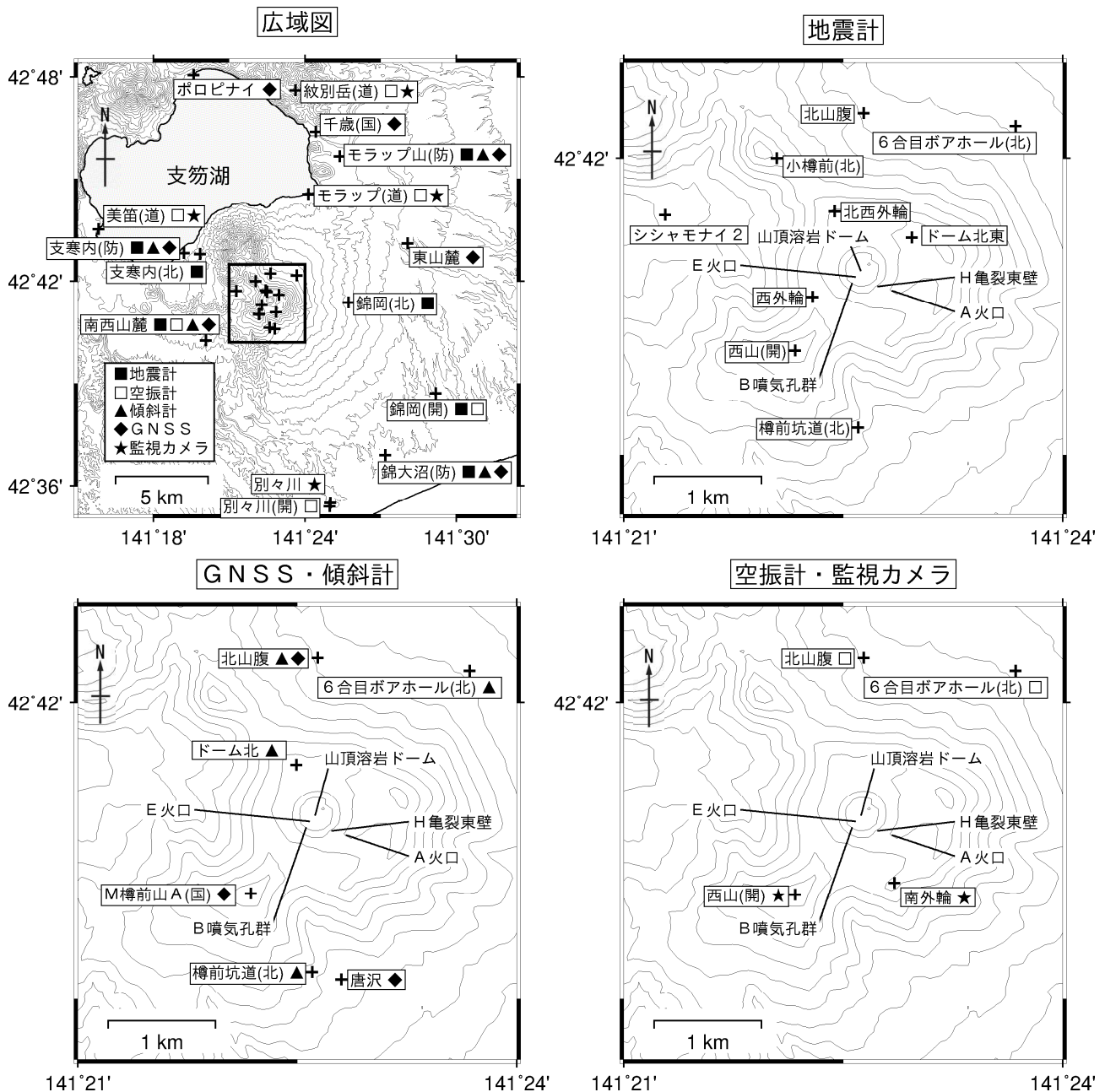


図7 樽前山 観測点配置図

各機器の配置図は、広域図内の太枠線で囲まれた領域を拡大したものです。

+印は観測点の位置を示します。

気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています。

- (開)：国土交通省北海道開発局
- (国)：国土地理院
- (北)：北海道大学
- (防)：国立研究開発法人防災科学技術研究所
- (道)：北海道